

使えば百円の乱費となる。

知らず知らずのうちに、毎日使う小さな金に注意しなければならない。

## (七)

・女は己を愛する者のために容かたづくる

さて諸君がこのように貯蓄したその結果はどうなるかいうと、仮に諸君の月給を三十円とする。それが次第に昇給して五十円となり、七十円となり、十年ののち百円になるとして、毎月その収入の二割を天引きしたものとす。

最初、諸君が取る三十円の二割は六円で、年に七十二円である。そして、最後の十年目に諸君が取る百円の二割は二十円で、年に二百四十円である。この最初の七十二円と最後の二百四十円をあわせて二分すれば百五十六円である。年々百五十円を貯蓄し、これに年五分の重利を付けければ、十年の終わりには元利合わせて二千六十円ばかりとなる。大した金高にもならない。

ここで、諸君はわずか二千円ばかりのことなら、福澤桃介のいうように、十年苦しんで貯蓄する必要はない。それよりもその二千円の金で派手に面白く暮らしたほうがよい。そのなかで、何かの拍子でうまいことにありつけるかもしれないと言いかもしれない。たしかに、二千円の金はしれたものである。

けれども、女は己を愛する者のために容かたづくり、士は己を知る者のために死す、ということがある。総じて物は可愛がるところに寄ってきて、可愛がらないところに寄りつかない。有心無心を問わず、つまり精神のある動物でも精神のない植物でも同じことで、何でも愛するところに集まるといのが自然の天理である。

豊臣秀吉がいかに偉かったところで、加藤清正を愛さなければ使われない。秀吉が多くの人を愛したからこそ、多くの人材が馳せ参じたのである。単に男ぶりが良いだけではいけない。

すなわち女は己を愛する者のために容かたづくる。女を愛さなければ、自分も女から愛されない。

## ・金は愛するところに集まる

金もまたそのとおりである。金を愛さなければ金は集まらない。

例えば、私のところへ一円紙幣が一枚入ってくる。そのとき私がその一円を放り出してしまえば、その金は「福澤という男は無情だ。せつかくオレが飛び込んで行ったのに追い出した」といつて、隣の愛するほうへと行ってしまう。

無心の金は何とも言わないが、それが世間にどういう風に現れるかといえば、金を愛して乱費しなければ自然と、あの人は実に感心な人だ、手堅い人だという評判になる。感心の人、手堅い人となれば、今度はそれを見込んでいろいろと有利な仕事をもち込んでくる。

これに反し、金を疎んじて乱費すれば、ついには借金で首が回らないようになる。のみならず、信用できない人として誰も相手にしなくなる。

すなわち二千円の金は知れたものでも、これによつて得る無形の信用は大きく、換言すれば、金が金を呼ぶこととなる。もし、誰も有利な仕事をもち込んで来る者がいないとしても、二千円でもないよりはよいではないか。

## ・銀行に預けるより投資せよ

以上は、単に貯蓄して低利の利息を得る場合のことを話したものである。月々収入の二割を天引きして銀行や郵便局へ預けても、その利息は前記のごとく十年間に五百円くらいにしかない。

しかし、銀行や郵便局のような単純な殖産法ではなく、また別の適当な方法で運用すれば、誰も有利な仕事をもち込んでこなくとも単に貯蓄したその金だけで、相当の資産を作ることができる。

さてそれなら、どのようにしてこれを運用するか。

諸君は月給取りの悲しさで、ほかで商売することはできない。すなわち銀行や会社勤めている者が小間物店を開くというわけにはいかない。といって、高利貸をしては世間の評判が悪い。

そこで私は、諸君に適切な投資を勧めたい。投資である、投機ではない。朝に買って晩に売るとか、今月買って来月売る。その値ざやを取ろうとする投機は、うまく当たれば一夜で成金となれる代わりに、とても危険であるから、けっして諸君

には勧めない。

確實なる会社の株券を買うか、将来騰貴の見込める地面を買うかの、二つの投資を勧める。これはその選択さえうまくやれば、安全でしかもとても有利である。

・やり方によっては五倍にも十倍にもなる

銀行や郵便局の利息は四朱か五朱にすぎない。十年間預けておいても、倍までにならないことは前に述べたとおりだが、これに対し、適当な投資をすれば五倍にも十倍にもなった例がいくらかもある。

かつて何かにも書いてあったようだが、東京瓦斯<sup>ガス</sup>会社は明治十八年の創立。創立当時は資本金二十七万円であったが、昨年には千七百万円、すなわち二十五年間に六十三倍となった。

そこで、この会社の創立当時の一株五十円で応募したと仮定すれば、増資のたびごとに株が増えるから、今日では六十三株の株主となっているわけである。一株の時価を百円としても六十三株で六千三百円で、この間、正金を払い込んでいるの

は三千百五十円にすぎないから、差し引き三千百五十円儲かっている。

このほかさらに、配当がある。東京瓦斯会社の配当は創立当時から今日までを平均すると約一割三分になる。

右はただ東京瓦斯に投資した例であるが、諸君がもしこういう方面に着眼して機敏に投資したならば、貯蓄した一千五百有余円の元金を持って、五万円、十万円となすことは敢えて難しいことではないだろう。

・一会社にのみ投資するは不可

ただその目的の選択には、十分な注意を要する。うまくやれば右のごとく儲かるが、下手にやるとその会社がつぶれて利息どころか元金まで無くしてしまうことになる。そこで、諸君が投資するには、その会社の基礎が堅実で拡張の見込みがあるものを選ぶと良い。

例えば、電気、瓦斯会社などは需要が増進する一方であるから、基本的に安全でしかも有利である。日本銀行、正金銀行などもまた、基礎が堅実で拡張の見込みが

ある。現に日本銀行株は、二百円払込みのものが六百円の時価を示している。これに対し、大日本製糖会社などは、規模も大きく一時儲かったこともあったが、将来はとにかく、過去においてはとても危険なものであった。

つまり投資には綿密なる注意を要するが、たいていにおいては、基礎が堅実で拡張の見込みあるものを選び、しかも一会社に全力を注がず、大きな会社で五朱以上の配当あるものを十くらい候補に挙げ、だんだんとその株を買っていくがよい。そうすれば、その中のひとつがつぶれても大した影響はない。

ただ、これを買う時期——安いときと高いときを買うとでは非常な損得があるが、これには多少の経済眼をもって、経済界の趨勢と会社の性質とを研究しなければならぬ。

そこで、諸君が前記の方法にしたがつて三十円から百円になる。十年間において天引き二割を貯蓄し、三万円もしくは十万円の資産ができたとする。三万円ではだんだんと物価が騰貴していくから困難だとしても、十万円なら優に妻子眷属を養っていくことができるだろう。

さて仮に十万円の資産ができたなら、この先諸君はいかなる方針を採ればよいか。

## (八)

### ・衣食足りて真の人間となれ

出世の秘訣も既に第八章に及んだが、この間薄給の諸君は次第に出世して、百円以上の月給取りとなり、十万円以上の資産を有することとなった。昔の格言に「衣食足りて礼節を知る」ということがある。

諸君が百円以上の月給が取れ、十万円以上の資産ができていれば、衣食足るに至っているだろう。では、これからは礼節を知らなければならぬのだが、私はこの格言を少し訂正して「衣食足りて真の人間となれ」と言いたい。衣食足れば独立の地位になったのである。

すなわち寄生虫的生活を離れたのである。ならばこれから、社会の一員として人間の本分を尽くさなければならない。